

ダンスと共に歳を重ねることで、社会における身体表現の価値を再認識する研究

児玉孝文（宮崎大学研究・産学地域連携推進機構／客員研究員）、豊福彬文（同国際連携センター／同）
野邊壮平（同研究・産学地域連携推進機構／同）、高橋るみ子（同／客員教授）

研究背景

本研究のきっかけは、ある振付家の SNS 投稿（ダンスじゃ食えない）である。振付家にとってダンスに関わり続けるための職業的選択肢は限られており、自身の職業的アイデンティティを維持することが困難な振付家も多い。そこで、振付家がダンスと共に歳を重ねていくために、振付家の専門性を社会のニーズと結びつける新たな方法を模索し、『動く、遺影！』を考案した。

研究目的・方法

本研究の目的は、動かないものを動かすことで、振付家に新たな雇用が生まれることを検証することである。この目的を達成するために、これまでにないプログラム「動く、遺影！イエイ！イエイ！」（『動く、遺影！』のメニュー）を、いわき市地域医療課（元地域包括ケア推進課）の猪狩遼氏及び東京都美術館、東京藝術大学と共同実施した。プログラムの参加者は、募集チラシの文言～「見る」「話す」「動く」「作る」など、からだ全体で美術館を楽しみ、今という瞬間を未来につながる「動く遺影」に見立てて残しましょう！～と、講師＝コンテンポラリーダンスの振付家に興味を示した首都圏のアクティブシニア 14 名。事後に、参加者に以下のアンケートを実施し、振付家に新たな雇用が生まれる可能性を検証した。

- ①参加されていかがでしたか？
- ②アーティスト（コンテンポラリーダンス）やアート・コミュニケーターや参加者同士のコミュニケーションにおいて、印象に残っていること
- ③今回“動く、遺影”を作ることで、ご自身の人生についてどんなことをふりかえりましたか？
- ④体を動かしてみて、「ダンス」や「遺影」に対するイメージの変化があったら、教えてください
- ⑤ご意見、ご感想、今後の希望などがありましたら、自由にお書きください

研究結果

多くの参加者が「ダンスが自由であることを改めて実感した」「心と身体がつながっていることを感じた」「歳を重ねても楽しめることがまだたくさんあると感じた」等の感想を残した。その結果、参加者は「見た」ことを身体で表現する活動を通じて、自己の新たな一面を発見し、さらに歳を重ねることに対する新しい視点を得たことが

確認された。また、「遺影」という文化的に重いテーマに取り組むことで、「自己の生と死に対する意識やその捉え方が変化した」や、「遺影に対するマイナスイメージが減り、遺影というテーマが重いものではなくなった」等の感想を残した。さらに、「動く遺影」を創ることで、人生のターニングポイントを思い出しました」「私らしいイメージの遺影ができ上がった」「思いがけない自分をみつけた気がします」「60歳を過ぎてから、年に1回遺影を撮っています。“動く”遺影ははじめてで、改めて心にひっかかっていることがわかったと思いました」や、「参加したい方はたくさんいらっしゃったと思います」という感想を残した。これにより、参加者が『動く、遺影！』を積極的に受け止めていることが確認された。また、「クリエイティブエイジングが素晴らしい」や「社会とのつながりを再確認できた」という感想から、『動く、遺影！』が高齢者の心身の活力維持に寄与し、自己肯定感や社会的な関係性にも良い影響を与えたことが確認された。プログラムを視察した福祉の分野の関係者からも強い共感の声が寄せられた。一方、振付家のサポートについては、「振付家が親切で、自分では気づけないことに気づかせてもらった」「寄り添ってくれたおかげで、安心して動くことができた」「振付家が明るく盛り上げてくれた」等の感想が多く、参加者が講師の専門性を高く評価していることが確認された。併せて、視察者の多くが、「振付家が個々のニーズに応じた指導を行っていた」と評価していたことから、振付家に新たな雇用が生まれる可能性が示唆された。



おわりに

『動く、遺影！』は、多くの振付家が、ダンスと共に豊かに歳を重ねることができるようになる＝振付家の未来を想像する中から生まれた発想が、地域包括ケアの専門家の猪狩氏の「一人一人の人生の物語を、そのステキな物語を埋没させることなく、光を当て直す。ステキな笑顔の遺影一枚では人生の物語を紡ぐには少し足りません。遺影が動いたら、きっと、思い出もより鮮やかに動き出す」と出会いスタートした。今後は、『動く、遺影！』を遺影の新たな選択肢として確立し、残された家族の人生も豊かにするモデルづくりを目指す。また、振付家が高齢者介護や福祉の関係者と協同して新たな役割を果たす仕組みを構築し、雇用機会の創出にもつなげていきたい。